

風合いに、素人ながら創作意欲が高まる雰囲気です。

七ツ森湖を目の前に臨む特等席のようなスペースで、体験のスタートです。まずは、台ヶ森焼の説明から。地産の粘土と灰を使用して作られる台ヶ森焼。土に含まれる亜炭鉱、鉄、銅から様々な色が生まれるのだそうです。



まずは安部さんのお手本から。あつという間に四角い粘土のかたまりが形を変えています。思わず職員からは「おー」と感嘆が。ろくろでのお手本では、微妙な力加減で意図した形になってゆく姿がまるで生き物のよう。



体験用の道具箱やろくろがたくさん。小学校の学校行事等での受け入れ時は、声を張り上げながら、机の間を走り回って指導するんですよ

と安部さんは笑います。



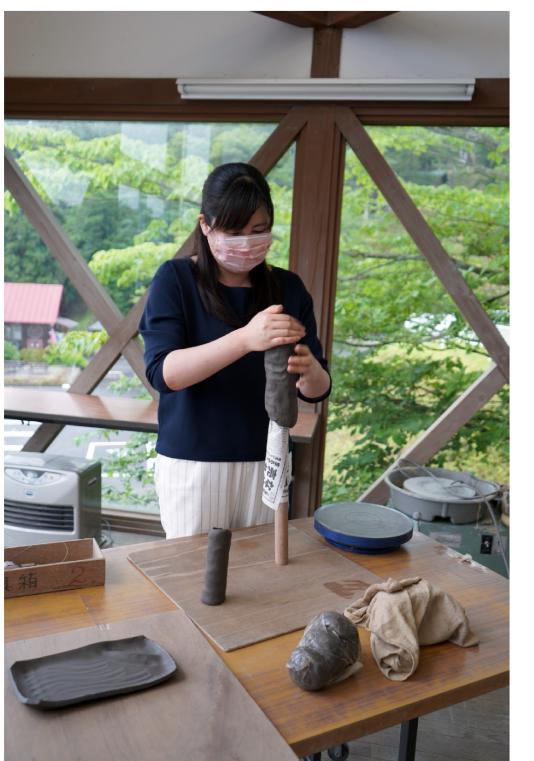
「何を作りますか?」と安部さんが取り出した四角い粘土の塊に、「いよいよ!」と気持ちも高まります。とはいえて、なら初心者に作れるのか……? ためらう職員に、「なんでも作れますよ!」と安部さんはにつくり。力強いお言葉に、かんのは花瓶、マツオカは刺身皿を作ることになりました。手のひらに触れる粘土の微妙な感覚に集中する私たち。安部さんが頃合いを見ながらサポートしてくれます。

慎重に花瓶の仕上げにかかるかんの、皿の表面を均等にしようと四苦八苦のマツオカ。自分では平らになつたと思つても、離れて横から見ると、均一になつていないので。安部さんはどうされているのですか」と尋ねたマツオカに、安部さんから驚きの一言が。

「見ないですよ」



このあと好きな釉薬の色を選んで終了! 焼き上がりは約1か月後。できあがりが楽しみです。



(上)均一に伸ばすことが意外と難しい!
(下)細長い花瓶を作るときは、棒に粘土を巻き付けて形を作っています。



登り窯の色見穴から中を覗くと見える白いものはゼーゲルコン。一定の温度に達すると倒れ、窯の温度を知ることができます。

七ツ森陶芸体験館の登り窯には3室の焼成室があります。一度火を入れたら1週間、交代で番をして焼き続ける大仕事。

窑の見学へ。緑に抱かれた窑に火が入り、熱の中で様々に変化する台ヶ森焼。この静かな場所に激しく心を奪われていました。

その後、体験館の裏にある安部さん、ありがとうございました!



電動ろくろを使った花瓶づくりも見せていただきました。土をろくろに乗せ、親指で中央に穴を開け、高さを出しとんどで目を閉じ、粘土に触れる手の感覚のみで行つていきました。その時間はとても静かで穏やかながら、粘土はその手の中で一瞬一瞬形を変えます。その姿を目の当たりにして、職員2人はすっかり心を奪わっていました。

最後にふたりの感想を。かんの「見るのは大好き」「実際に見聞きしながら土に触ることができてとても楽しかったです。物産展実施の際に、作品をご紹介させていただく時に活きてくる貴重な体験になりました!」

安部さん、ありがとうございました!

なんと、見ない?! 「平らになつていいかもとか、平らになつているだろうとか、見てしまうことでどちらの錯覚も起こってしまうのが、見えないんです」

数えきれないほどたくさんの作品を造り上げてこれらの方の一言の重み、さすがの一言です。到底初心者には真似できない技だけに、安部さんの助けを借りて、なんとか完成の形に漕ぎつくことができました。それぞれ出来上がった作品に達成感を覚える職員たち。陶芸って楽しい!

「日常をほんの少し贅沢に、豊かにするもの。より生活に近いものが今、そしてこれからは求められるのでしょうか」

手仕事が生み出す形の美しい手は、手に取る人の感覚に訴え、心地よさを与えてくれるもの。安部さんの作品づくりは、熟練を重ねてなお終わらない、到達点を探り続ける旅のようなものに思えるのです。

く強いエネルギーが宿る様を想像すると、そわそわと浮き立つ思いがします。

芸術品であり、日用品でもある作品について、安部さんは言います。

またチャレンジしたいです

マツオカ「実際に見聞きしながら土に触ることができてと

ても楽しめたです。物産展

実施の際に、作品をご紹介さ

せていただきました時に活きてくる貴重な体験になりました!

5